

安江奈代子さんご紹介

(佐見地区出身)



今回お話を伺うにあたりお声をかけると「足が痛くて歩けんで、サンシャインに入れて良かった」と感謝の言葉からお話しがはじまりました。

幼いころはおばあさんと身体が不自由なお母さんとの生活でした。お母さんは不自由な体で縫い物をする努力の人でした。板笠をかぶって運動会を見に来てくれたことが、恥かしくも嬉しい思い出のことです。

離れて暮らすお父さんが人づてに預けてくれた生地で、エプロンを作ったことは嬉しくて忘れられないとのこと

です。小学校六年生の時にお母さんが亡くなり、おばあさんと二人の生活となりました。奈代子さんが十五歳のとき十歳年上の思いやりのある新しいお母さんが来てくれました。

奈代子さんはご主人を迎え、四人の子宝に恵まれ、同じ頃に妹も産まれて賑やかな家族になりました。それも束の間、ご主人が突然亡くなり、夫婦生活は十年程で終止符が打たれました。

その後、学校給食作りの仕事を引き受け、可愛らしい生徒から給食のおばさんと呼ばれ親しまれていたそうで

す。そして仕事仲間との旅行やボウリングは、一時を忘れ楽しかったと話されます。

今は子供や孫が幸せに過ごしていることに「天に借金をしなんだんやなあ」とお父さんの教えを守れたことを静かに話されました。

現在ご自分で施設内の本棚や、みなさんと過ごすテーブルへと、車椅子を上手に操り移動されています。編み物が得意でユニットの椅子カバーは奈代子さんが編んでくださったものです。面会に訪れる多くのご家族に囲まれ、談笑される姿が印象的で担当の職員は話します。

ご家族から贈られた本や新聞を読み穏やかな日々を送られている奈代子さんの表情を温かく感じました。



▲本と作品に囲まれる奈代子さん

サンシャイン 周辺探訪

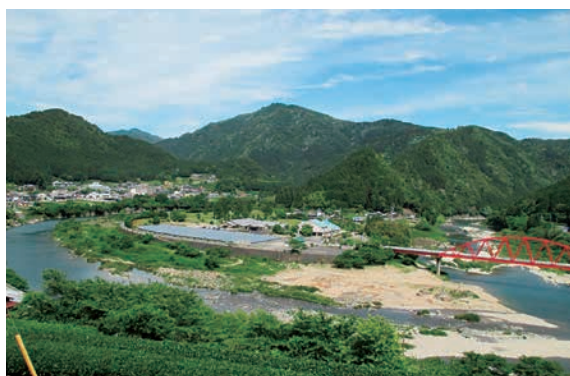
大変だった島からの通学

地域密着型特別養護老人ホームあいらんど美濃白川がある河岐の島地区は、三方を飛騨川に取り囲まれ、背後には急峻な山が迫る。「島」のような地形のところですよ。

現在は、飛騨川に橋が架かり（昭和60年）、名倉発電所方面へ通じる道路も整備され、交通の便の良い地域になっていきます。しかし、60年程前まで、島地区の子どもたちの通学は、危険と隣り合わせでした。

名倉発電所方面への道路は、昭和40年代の初めに、ようやく自動車が行き通じられるようになりましたが、それまでは、人が歩ける程度の山道でした。学校は坂ノ東小学校へ通いました。通学路と呼べるような道はなく、人ひとりがやっとなれるような飛騨川の岩場を驚原まで行き、そこから対岸の相模へは国鉄の鉄橋を渡り、県道（旧国道41号）まで登って学校へと向かいました。

別のルートとしては、飛騨川の渇水時には河原を歩いて（時に膝下まで水に浸かりながら）、水位の高い夏場には川舟で、対岸の大利に渡りました。増水して鷺原への道が通れない日には、白川口駅まで歩き、バスで登校することもありました。さらに洪水になると、名倉発電所への道も濁流に沈むため、島から出ることができず、学校を休みました。



▲島地区の全景

また、学校にいる間に飛騨川が増水して帰宅できない恐れがある時には、上級生が天候を見ながらそれを判断し、先生に申し出て島の子どもたちだけ「はやびき」をしました。

国鉄の鉄橋を渡って通学することなど、いまでは到底考えられないことですが、通学路が整備されていない時代、やむを得ないこととして黙認されていたのでしょうか。

当時、親たちも先生方もさほど心配するふうではなかったようです。その分、子どもたちは、「自分の命は自分で守る」といった判断力を身につけていったように思います。